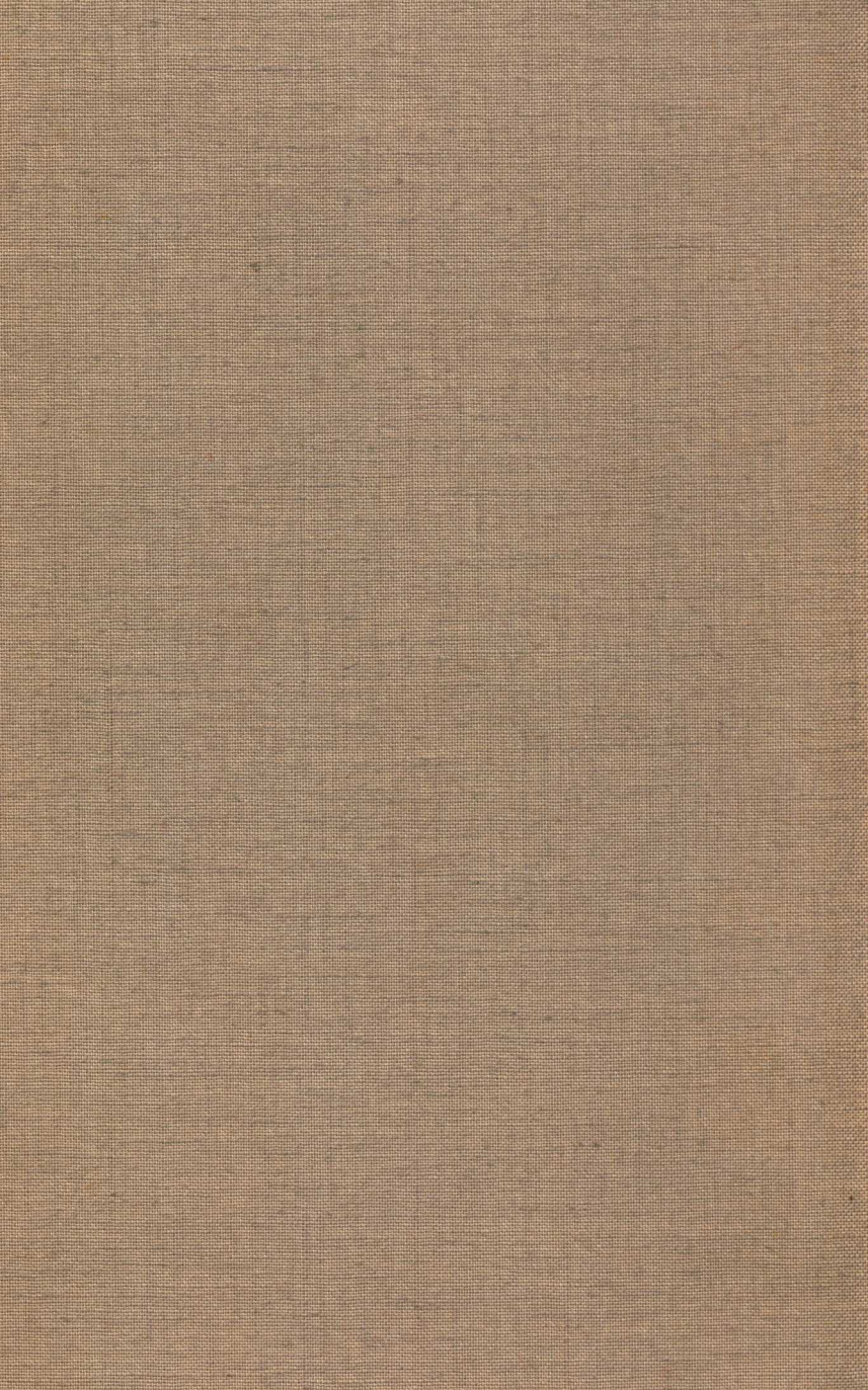




遠藤周作文学全集 5
新潮社版

学

アとよぶ女



留^{りゆうがく}学・ユリアとよぶ女^{おんな}

遠藤周作文学全集第五卷

定価一五〇〇円

印刷 昭和五十年四月十五日
発行 昭和五十年四月二十日

著 者 遠藤周作（えんどうしゆうさく）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 03(二六六)五一二一
編集部 03(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八

印刷所 三晃印刷株式会社
製本所 新宿加藤製本株式会社

© Shusaku Endo, 1975. Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

留 学	5
*	
道 草	269
雑種の犬	281
土 埃	297
ユリアとよぶ女	315
解題	357

遠藤周作文学全集

第五卷

小説 5

留

学

第一章 ルーアンの夏

こんな鏡を工藤は日本で一度も見たことはない。楕円形だえんけいの形はいいとしても唐草模様の縁をけ
ばけぱしい金色で塗りたくっている。バロック風の装飾を真似たのだろうが、どう見ても品のい
い品物ではない。おまけに「これによりて汝の真の姿を正せ」と言う言葉をかいた銅板がはめて
ある。

この鏡の中に昼寝をすませたばかりの、汗の滲にじんだ顔がうつった。仏蘭西フランスに来てからまだ一カ
月にもならぬが、やはり旅の疲れや神経を使う毎日のせい、頬の肉が少し落ちたようだ。そし
てなぜか、背中に鈍痛を感じる時もある。時計をみるとまだ二時半。家のなかには静まりかえり、
窓からみえる庭塀にわべいに夏のきびしい陽光が真白にぶつかっていた。家の者たちはまだ午睡中らしい。
登音あしおとをたてぬように階段を降りると、台所からジャムを作る果実の匂いがぷんと鼻についてく
る。その台所では年とった女中が背を向けて立っている。彼女の黒い影がくつきりと石の床に落
ちているが何をしているのかわからない。散歩にいきますと丁寧に声をかけたが耳の遠い女
中は返事をしなかった。

夏の仏蘭西では日本とちがって午後二時半は、まだ食後の時間である。石畳が乾いた河床のよ
うに光っている。広場には人影もなく噴水もとまり、運転手のおきざりにした自動車が二台、街
路樹の下におかれてあった。Pharmacieと看板をだした薬屋も Antiquité というペンキの文字
を窓に書いた道具屋も陽ざしが弱くなるまで扉を閉じている。

水の枯れた噴水の縁に腰をかけ、工藤は何処^{どこ}に行こうかと思案した。このルーアンに来てから
一週間も経たぬのに、たいていの場所は見歩いてしまったのだ。ロダンが愛したと言う有名な大
教会はここから左に行けばよいが、それだってもう三度も見物している。キャフェや土産物屋で
売っている町の絵葉書には必ず、ジャンヌ・ダルク幽閉の古塔がうつっているけれども、あそこ
だってもう幾度訪れたことか。彼女がつなかれたという湿っぽい暗い部屋や当時の井戸を説明す
る案内人の重々しい口調まで暗記してしまったくらいである。

そのほかには、駅のちかくにあるフローベルの家と、ジャンヌが火刑にされた刑場のあとしか
ない。フローベルの家は午前中しか開館していないし、ジャンヌ処刑場には白い服を着て両手を
胸に重ねた彼女の像が一つ、たっているだけだ。この時刻には強い陽がその像に暑くるしく差し
ているだろう。

ベネディクト派の丸い帽子をかぶった司祭が通りを横切ってこちらに歩いてきた。噴水の縁に
腰をおろしている工藤を見ると足をとめて、まるい大きな顔の唇のあたりにこちらを見下すよう
な笑いを浮べた。

「ペロオさんのお宅にいる日本の学生さんだね」

工藤があわてて腰をあげると、手で制しながら、

「君のことは奥さんから聞いたよ。ルーアンの町をどう思ふかね」

「ええ、いつまでも住みたい町だと思います」

司祭の黒服が広場からサン・ジャック通りにむかう路に消えていくのを彼はぼんやりと見送っていた。小さな町だから工藤のことはまだ一カ月にもならないのに色々な人たちが知っている。散歩の時、向うから来た婦人たちが、微笑をうかべながら近寄ってきて、今の司祭と同じようなことを言ったことも、二、三度あった。そのたびに工藤はできるだけいい感じを相手に与えるように微笑をつくり頭をさげた。

港に行こうかと思った。あそこなら、風のない街でやっと息のつけるただ一つの場所のような気がする。いつか、ペロオさんの車に乗せてもらって港まで行ったことがある。港といってもセーヌ河につくった荷船の船つき場にすぎないが、野菜や果物をつめた箱を肩に背負った人足たちは、町の人々のように工藤に注目したり言葉をかけてきたりはしなかった。それにこのセーヌ河のずっと上流には巴里がある筈だ。ルーアンとちがって、おそらく彼に息をつかせてくれる都市がある筈だ。

だが、この陽ざしの中を港まで歩くのは、やはり億劫だった。結局、散歩をやめてふたたび戻るより仕方がない。

(煙草と航空便の便箋を買わなくちゃいけないな)

薬屋の隣の煙草屋は人影がなかったが、入口はしまっていないかった。扉を押すと、ぶら下げた小さな鈴の音が頭の上でかすれた音をたてた。赤いスポーツ・シャツを着た栗色の髪 of 青年が姿をあらわし、工藤をじっと見た。

「日本の人でしょう」

「そうです……」

「なにね、新聞で読みましたよ。あんたのこと。教会で発行している新聞だが、ペロオさんのことも書いてあったな」

硝子^{ガラス}ケースの向うからグローブのように厚い手をさしのべてくる。工藤の掌が中にすっぽりと包まれてしまうほど大きな手で、内側が汗ばんでいる。

「どうです。ルーアンは気に入ったですか」

工藤はさきほどの司祭に見せたのと同じような微笑をつくって、

「ええ、いつまでも住みたい気がします」

「仏蘭西人は親切でしょう」

「本当にそう思います」

青年は満足そうにうなずいて、うしろの棚に積み重ねてある煙草を二つ握^{つか}むと、

「とりなさい。金はいらない」

と言った。

午睡から覚めたのであろう、家の中で登音が聞えはじめたが、まだ陽の光が溶けた錫^{すず}のように光りながら床にも机の上にも流れこんでいる。二箱の煙草を工藤はベッドに寝そべったままじっと見つめた。ゴロワーズといって、この国では一番よく吸われる煙草だ。

(ただで煙草をもらった)

自分は代金を払わずにこの煙草を受けとった。ああ言う場合、相手の気持を傷つけないで金を渡すにはどうした表現を使っているのか、彼のまづい仏蘭西語ではうまく言えなかった。礼を言っただけで店を出たが、工藤の掌には青年の汗ばんだ大きな手の感触だけではなく、なにか鬱陶^{ふさふさ}しいも

のが、残っている。

(ただ、なのは煙草だけじゃない。この家でもみんなた、だ)

工藤はペロオさんの家で間代も食費も払う必要がない。ペロオ家では教会の希望に従い悦んで工藤を夏休み中、あずかることに同意してくれたからである。

二年前、ローマのカトリック東洋布教会では東洋の学生たちをヨーロッパの各国に留学させる計画をたてた。日本からも西班牙、伊太利、独逸、そしてこの仏蘭西に各一名ずつよばれることがきまった。そして選抜された学生の滞在費や学資はそれぞれ国の信者から集めた寄附金でまかなうことになった。

それは終戦後まだ五年もたっていない年で、日本はよその国と平和条約も結んでおらず、大使館や領事館も閉鎖していた時だったから、外国に行くことなどまだ夢のような話だった。工藤はこの時ばかりは自分が子供の時、洗礼を受けたことを感謝した。選抜の試験はそう、むずかしくなかった。むづかしかったのはむしろ、日本政府の許可を得たり、仏国のヴィザを取ることのほうだった。

こうして工藤は三人の仲間と一緒に真白い仏蘭西船で横浜を発った。彼があゝの国で勉強するテーマは基督教文学ということになっていたが、こんな勉強よりも見知らぬ国に行けるといふ悦びのほうが胸を充たしていた。友だちは彼を羨んだが、工藤も得意だった。彼は減多に訪れないというした幸運を足場にして自分の将来を組み立てようと思った。留学ということはまだ日本の青年にとって出世の足がかりという意味を持っていた。

一カ月をこえる船旅の後、マルセイユに着くと港には、黒服を着て縁の広い帽子をかぶった聖職者たちが迎えに来ていた。工藤はその司祭の一人につれられてマルセイユから巴里に向う汽車

に乗った。年をとって眼の光の優しそうな司祭は汽車の中ではあまり口をきかず、革表紙の祈禱きとう書をめくっている。

「私は、どうなるんでしょう。これから」

心細そうに工藤が懸命になれぬ仏蘭西語できくと、老司祭は本から顔をあげ、女のように優しい笑いをうかべて、

「心配はいらない。君を夏中、あずかってくれる家も見つかったから」

はじめてペロオ一家のことを話してくれた。ルーアンにある熱心な信者の家で進んで工藤をあずかると申し出てくれたのだそうである。

「その家にいつまでお世話になるのですか」

「夏休みが終るまで。大学が始まってからは、別の家を探してあげる」

司祭は、仏蘭西に来て、本当の家庭生活を見なければ何もならぬと説明した。君はそこでもっと仏蘭西語を覚え、信者の家庭がどういうものかを学ぶことができるだろう。

「みな、期待しているよ」

「期待と言いますと」

「君たちの留学がやがて日本の布教に貢献することをだ。そのために仏蘭西の信者たちは金を出してくれたんだし、ペロオさんも悦んで君を引きとるわけだからな」

工藤は自分を引き受けてくれるその仏蘭西人の家や彼等が住んでいるルーアンの町を想像しようとした。ルーアンの町については僅かなイメージしか持っていない。それはコルネイユが住んだ町であり、「ボヴァリー夫人」が憧れた小さな町だ。ペロオ家はこの町に代々、住みついた地主である。夫人は心臓が弱く夫婦の間には子供がない。いや、神学生だった息子が一人いたこと

はいたのだが、戦後、交通事故で死んでしまったと言う。

「君と同じ年に生れた息子さんでね。日本に布教に行きたがっていた。ペロオ夫人が君をあずかってくれたのも、その息子が持っていた夢をこういう形で実現しようと思われたんだろう。奥さんが心臓が悪くなったのは息子さんの死による衝撃のためだ。随分長い間彼女は部屋に閉じこもったきり、外出もされなかった。元氣になったのはそう、日本の学生を仏蘭西に迎えるという話が教会で計画されてからだよ。つまり、彼女は息子の夢を君をあずかることによって、果そうとしているわけだね」

巴里に汽車が滑りこむ前、この神父は古い手さげ鞆かばんの中から白い封筒を出して、

「とりあえずこれだけ渡しておくがね。いいか。その一枚、一枚の紙幣に仏蘭西信者の期待がこめられていることを忘れないようにしなさいよ」

工藤は万一の場合を考えて、安全ピンでその封筒を上衣うわぎの内ポケットに縫いつけた。体を動かすたびにその安全ピンの先が胸にあたる。封筒の中の紙幣はこの国の信者たちが、彼のために金きんしてくれたものだと思うとかすかな痛みのようなものを乳のあたりに感じてしまう。

階段を登る登音がする。夫人の登音ではない。心臓の悪い夫人の登音ならもっとゆっくりとして力がない。あのせかせかとした登音はペロオ氏の妹でいつも喪服のような黒い洋服を着ているアンヌさんという老嬢だ。ルーアンから少し離れたヌウ・シャトルの小学校教師だが、心臓の悪い夫人にかわって家事を切りまわしている。

「扉をあけてもいいですか」

あわてて工藤はベッドから体を起した。枕もとに散らかったシャツや新聞を片附ける暇がない。「散歩から帰ったばかりで」ワイシャツをズボンの中に押しこみながら工藤は弁解した。

「部屋が乱雑なままです」

机の上においた二つの煙草の箱や本やノートをじろじろ眺めているアンヌさんは、背は低く、栗色の髪には白髪がまじっている。若い頃は綺麗だったのか、醜かったのかわからないが、どこか強情そうな顔だ。どうしたわけか、工藤のことを、晶貞にしてくれるけれども、その気持が彼にはかえって重くなることもある。こうした女性の感情はいつ変わるか、わからないからだ。工藤は素早く相手の顔色を窺いながら、

「御用だったでしょうか」

「いい知らせを持ってきましたよ。ポール」

「いい知らせ？」

「あたしたちがやっている小さな会のためにあなたはお話するんです」

「ぼくが？」

「もちろんです。ポール」

ポール。ポール。工藤はこの家では夫妻や、アンヌさんからこんな名前と呼ばれている。それは彼がむかし、洗礼を受けた時もらった霊名だが、ペロオさんの死んだ息子も偶然同じ名だったからだ。工藤の霊名と息子の名とが一致していたのを知った時ペロオ夫人は、嬉しそうに叫んだものだ。これからあなたをポールと呼びますよ。そのほうが親しみが湧きますからね。わかるでしょう。

ポールと言われるたびに工藤は背中あたりに、たまらない恥ずかしさを感じる。が、今ではもう微笑をうかべて諦めることにしていた。

「無理です。みなの前で何かをしゃべるほど、仏蘭西語もできないし」